# ガイドが綴る北海道　ー添乗さん乗ってます？ー

織春久遠

はーいガイドのUですこんにちは。今日も元気で頑張りましょうね！
さて、本日のお題はあるこまめな添乗員さんの話しです。それは淡路島のお客様を８０名ほど２台連行で北海道１周の旅で引っ張っていたときの話しです。
バスが２台ですとガイド・運転士は各２名、添乗員が１名というパターンがほとんどです。添乗員が２名でガイド運転士が各１名だとバスが片一方動きませんので。（アホなこと言ってます）ところが、添乗員さんが１名ですと片一方のバスには伝達事項、時間の案内、行程についての注意はなかなか行き渡りません。乗務員とのミーティングのときに指示があって、ガイドのほうからお客様に連絡を徹底するのですが、添乗員さんによってはやはり自分からちゃんと話をしなければいけないと、途中でバスを乗り換えて連絡を行う方がいます。
この添乗員さんFさんもそういったタイプでした。通常は午前中に１号車に乗ったら、午後は２号車というふうに乗り換えます。そのほうが添乗員さんも名前を覚えてもらえますし、何よりお客様の把握が出来ます。ご機嫌が斜めな方はいないか、何かお困りの方はいないか、ガイドでは至らないことも添乗員さんがきっちり把握することが出来れば旅行は成功間違いなしですから。
添乗員のFさん通常よりもほんのちょっとだけ乗り換えの頻度の高い方でした。トイレ休憩から下車しての観光まで途中で「ちょっとあっちの号車に行ってきます。」といって風のように去って

いきます。次の停車地点ではまた風のように現れて「ただいま戻りました！」と乗り込んできます。
年齢は３０代の前半でしょうか、お客様に一生懸命な姿は私たち乗務員には大変頼もしく映りました。運転士さんたちも「急ぐとき言ってくれ、俺はこう見えてもB級ライセンスもってんだ。他の大概の車には負けやしないぜ。」とエールを送っていました。
その日私たちは層雲峡温泉を出発し、滝川の松尾ジンギスカンで名物の味付きジンギスカンを食べ、江別の先札幌の手前、幌向のドライブインまでやってきました。ここから先は苫小牧の先白老まで休憩地点がありませんので、トイレ休憩で車を止めたとき添乗員さんまた「ちょっとあっちの号車に行ってきます。」と言って出発間際にバスを降りました。
１号車に乗っていた私はそれではと言ってバスのドアを開け、何時ものように添乗員のFさんを送り出しました。バスを国道に入れる前に２号車を見ますと、２号車も動き出していましたので添乗員さんも２号車に乗ったと確信してバスを出しました。
国道１２号線に乗ると後ろにはもう２号車がついてきておりました。さあ、先ほど中断されたお客様を白老に忘れてきた事件の話の続きが再開され、バスの中は一気に盛り上がります。
しかし、そのとき事件は起こっていたのです。そうです！２号車に乗っているはずの添乗員さん何を思ったのか２号車に乗る寸前くるっと振り向いて１号車のほうに歩き出したのだそうです。それを見た２号車の運転士、あ、今度は１号車のままだと思ったそうです。で、一度動き出した１号車がドライブインの端でいったん停車したので乗ったなと思いそのままバスを動かしました。１

号車は２号車が動き出したから大丈夫と判断しました。肝心の添乗員さんは何を思っていたかといいますと、１号車に時間を書いたメモを忘れたんでそれをとってから再度２号車に乗ろうと思って、１号車に向かって駆け出したんだそうです。そうしたら１号車が出てしまったんでまた再び２号車に乗るために戻ったそうですが、その時は２号車も既に動いていた。
混雑しているドライブインの駐車場の中とはいえ、バスは添乗員の姿を視界の中に捕らえる事が出来ずに２台とも出発してしまったのでした。
国道１２号線を南に向かって走るバスを見ながら添乗員Fさんは叫びます。
「EIRAKU!カァムバアークゥゥ！！！」 というのは相当作った話しですが、真実は倒れそうなくらいびっくりしたそうです。視界が急に狭くなり（視野狭窄といい急激なショックによる血圧の変動が原因だそうです）呆然としてバスを見送っていたそうです。
時間にして１０秒ぐらいでしょうか記憶の糸がぶっつんと切れたまま、駐車場のど真ん中で佇んでいますと背中から声が掛かりました。
「添乗員さんどうしました？永楽さんのバスもう出発しましたよね。」
幌向のドライブインの社長さんでした。
「バスに置いていかれました・・・」
「ええっ！そうなんですか！永楽のあのガイドさん気い強いのは知ってたけど、そこまで怒らしたのは添乗さんが始めてで

すわ。」
この社長もなんちゅうこと言うねん！
「ちゃいます。僕がドジやったんです！」
事の次第を話すと、くだんの社長さん胸を叩いた。
「分かりました。このままでは添乗さんもお困りでしょう。私、車で追いかけてあげますわ。」
渡りに舟、地獄で仏とはこのことと、添乗員さんありがたくお礼を言って社長の車に乗り込んだ。置いてけぼり事件発生から２０分後、二人は国道を避け一路苫小牧方面へと近道をひた走るのであった。
その頃私たちのバスは国道１２号線に別れを告げ苫小牧に通じる国道へと車を進めていた。この道路は苫小牧から札幌を抜けずに砂川方面に通じる道路で、車の往来が少なくバスにとっては走りやすい道だった。時々無茶をする若者がいるためほぼ全線追い越し禁止で、車の通行量が少ないため走行時間が計算し安い道だった。
豊栄ドライブインの社長と添乗員のFさん、旧式のセドリックで抜け道からこの国道へと次第に追いついてきた。バスが白老方面に向かうとしたら時間的に込む３６号線は使わずに平行しているこちらに来るだろうという社長の読みはドンぴしゃりだったのである。
前方に小さく永楽のバスが見えたとき、添乗員さんは思わず涙をこぼしそうになったと後で言っている。
旧式でもセドリック、見る見るうちに追いついてバスの後ろにつくことが出来た。しかし、ここではたと困ってしまった。前のバ

スを止める方法が無いのである。予定では白老まで停車はしないことになっている。
「前に出てブレーキかけたら止まりますやろ！」
「ぶっけられたらどうするんですか？無茶言ったらいけません。とりあえずヘッドライトでパッシングしてみます！」
旧式のセドリックが後ろから迫ってきたのを見ていた２号車の運転士Yさん。国道をすんごい勢いで飛ばしてくるんで、若者が暴走行為をしているのかと勘違いしたそうです。その車が後ろにぴたっとつくと、やがてパッシングを始めた。地平線の果てまで見渡す限り前にも後ろにも車はバスが２台とパッシングしているセドリックが１台のみ。
やっぱりこれはこの車を相手にパッシングしているのだなと思いました。乗客の安全のためにはそんな車を相手にはしてられません。Yさん窓から手を出すと先に行けと合図を送りました。しかし、相手はパッシングを止めようとはしません。次第に運転士さんも不安になってきました。
スピードを緩めてみました。しかし、追い抜く気配がありません。その頃後ろのセドリックでは「スピード緩まりました、止まりますよ、きっと！」とか言っているだけでした。
しかし、追い抜く気配がないセドリックに運転士のYさん再びスピードを上げます。
「あ、いかん、なしたんやろ、こっちのことわからんのやろか？」
「わかんないから止まらないんでしょうね。」

「今度はクラクションならしたらどないやろ。」
「クラクションはやめたほうが・・・」
「そないなこと言っても他に方法ありしまへん。やってください！」
「どうなっても知りませんよ！」
その頃には１号車も事態に気付き始めていた。先ほどからおかしな乗用車に２号車がまとわり付かれているようだと思ったがなんとも出来ない。
２号車のYさん再び加速したところで、後ろに又ついてきたセドリックが今度はクラクションを鳴らし始めた。それも単なるクラクションではない。例の暴走族の車のぷあぷあぷあぷあぱぱぱぱぱっぱっぱあと、派手な音が他の車がいない国道にこだました。
「な、な、なんですかあ、このクラクション？」
「前の持ち主が暴走族だったらしくて。」
「えらい音ですな。」
「もうやけくそですわ。」
連続的になるクラクションに２号車の運転士も乗客もパニックを起こし始めた。
「安心してください。バスの場合万一ぶつかってこられても大丈夫ですから！」
「ガイドさん！わしら農作業で鍛えた体じゃ、あんな暴走族の１０人や２０人まとめてめんどうみたるわい！」
「うちら８０人おるんじゃ、生意気な暴走族の小僧ども生まれてきたことを後悔させちゃる！」

「北海道の暴走族がなんぼのもんじゃい！田舎もんだとおもってなめたらあかんぜよ！」
だんだん怖くなってきた。運転士のYさんが言った。
「抜かれて進路妨害されると事故の危険性があります。お客様には立ち上がらないように言ってください。」
その頃後ろのセドリックは一向に止まらないバスに業を煮やしていた。
「あきまへん、やっぱり抜いて、ブレーキかけな駄目とちゃいまっか？」
「う～ん、それ、危ないんでやりたくないんだが、しょうがないか。」
セドリックが追い抜こうと加速を始める。
２号車の運転士も抜かれては大変と加速を始める。
「B級ライセンスを持つ俺だ、なんびとたりとも俺の前を走らせねえ！」
古い漫画のシーンのようにバスとセドリックのカーチェイスが始まった。
「どないナットるんですか？」
「どうやら我々が暴走族で、危害を加えようとしていると誤解しているようです。」
「そんなアホな！」
「窓から顔出して、怒鳴ってみてください。」
添乗員のF言われるままに追い越しをするために反対車線に行って並びかけたとき声を限りに怒鳴った。

「おれやおれやおれや！バス止めてくれえ！」
バスでは右の座席の人が言った。
「窓から体乗り出した暴走族が『おらおらおら！バス止めんかこりゃあ！』って怒鳴ってるぞ！」
「あほんだら！どこのもんじゃい！って返事したれや。」
「なんぞ武器は無かったか？」
車の中は騒然としてきた。 運転士さんは、必死で抜かれまいと運転していた。
「おい、バスとセドリックじゃ不公平じゃどないする？」
「何ぞ物ぶつけたれ。」
「事故起こさん程度に運転のじゃましたれ！」
右の窓がいっせいに開け放たれ、並びかけてきたセドリックにいかくんやチーズおかきが投げつけられた。
「あっ！いかん！」
フロントガラスにプリンが広がって社長が車を後退させる。
添乗員のFさんは「社長さん、運転下手ッすね！」
「あんたねえそんなこといってる場合じゃないでしょ！なんか考えなさいよ、こっちが誰だか分かってないんだから、何とかしないと・・・」
「あっ！そや！」
「なんですか？」
「いい考えありますわ、も一回今度は抜かんでもええから、並びかけてください。」
「あんた、人が命がけでやってるのにえらい簡単にいいますな！」

「すんまへん！」
何度か抜こうとして失敗してバスの後ろに下がっていたセドリック、再度ダッシュしてバスを抜こうと反対車線に出た。
「またきよったで！」
「再度爆撃開始や！」
既に準備を整えていた右舷砲台から、ありとあらゆるものが投げつけられた。添乗員のFさんは投げつけられる甘納豆やポテトチップスのかすを身に受けながら、セドリックから体ごと乗り出すと右手につかんだ物をバスに向かって突き出した。
「砲撃止めーっ！やめっ！やめっ！」
「なぜとめんのや、わし次に取って置きのたらの燻製用意しとったに！」
「あれ見てみ！」
バスの横ではセドリックから身を乗り出した添乗員が、体に投げつけられた柿の種やポテトチップスなどのお菓子の屑をつけ、水戸黄門の助さんが『この印籠が目に入らぬか！』とでも言うように、オレンジ色の腕章を右手に持ってバスに突き出していた。その様は一号車からも目にすることが出来、事の成り行きをバスの後ろにごちゃごちゃに集まってみていた人が言った。
「あれ、添乗さんやんけ。」
「なに、車に乗って遊んでんのやろ！」
「水戸黄門みたいでかっこええやん！」
「添乗さん、あんな危ないことして遊んだらいかんわ。」
２台のバスは止まった。 お話はここまでにしたいと思います。バ

スは又楽しい旅を続けました。おしまい、おしまい。

# ガイドが綴る北海道　ー添乗さん乗ってます？ー

http://p.booklog.jp/book/57593

著者：織春久遠
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tadami5555/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/57593

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/57593

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ